

二〇二一年度
入学試験

国語

一回（二月一日） 富士見中学校

注意事項

- (1) 問題は1ページから25ページまであります。
- (2) 問題にページ不足や印刷の良くないところがあれば、すぐに手をあげて、監督かんとくの先生に伝えてください。
- (3) 解答はすべて解答用紙の定められた場所に、指示通りに記入してください。
- (4) 句読点等は字数に数えて解答してください。



次の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 彼の無実を証明するためにベンゴする。
- ② おやつはレイゾウコに入れてある。
- ③ サガクを支払う。
- ④ ヒミツを守る。
- ⑤ 学級委員をツトめる。
- ⑥ 唯一の女性大臣としてコウイッテンの輝きを放つ。
- ⑦ 自慢の作品です。どうぞごらんください。
- ⑧ 視力の低下が著しくガンカを受診したい。
- ⑨ 志望校に合格した友人をシユクフクする。
- ⑩ 彼女の優秀さはグンを抜いている。

(問題は次のページに続きます。)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(作問の都合上、本文の一部や小見出しは省略してあります。)

少し前、こんなことを考えていた。夏になると聞こえてくる蟬せみの声。蟬は実は(土の精)ではなからうか(ちようどクラゲが(水の精)であるように)。普段、人々に踏みしだかれていただけの土が、夏のごく短い間だけほんの一瞬いつしゆん、羽と声をもらい、楽しみに飛び回って、やがては元の土に戻もどっていく。だから夏の終わりに仰向あおむけになって死んでいる蟬を見ても、それほど悲しむ必要はない。彼らはまた元の土に戻るだけなのだ、と。

実は、もう五、六年ほど前になるだろうか。私はいま述べたこととはずいぶん違ちがう方向性の話を学生に何度かしたことがある。昆虫こんちゆうが恐おそらくは **X** などはもたないだろうからという推定の下に、彼ら昆虫はほとんど機械きかいのようなもの、神様かみさまが創つくったロボットのようなものだから「蟬が死んだ」ではなく、「蟬が壊こわれた」と述べてもいいのだ、と。こんな言葉を二年ほどの間、授業中何度か口にした。同じ死に行く蟬について、最初の話と二番目の話は、どちらも死そのものを悲しまないという意味では収斂しゆうれんするようにみえるが、事実上は、その背後※てつがくの(哲学)はまるで正反対のものだ。私自身の中に、動物一般いっぱんについてはともかく、昆虫の命についてほとんど正反対の方向をもつ発想が混在していたということになる。(中略)

その二つの方向性の中で **Y** していた私も、現在ではどちらかというと前者の方に振ふれているらしい。というのも「『蟬が壊れた』といってもいい」という言葉について、私は、自分が口にした言葉であるにもかかわらず、徐々じょじょに醜みにくさを感じるようになり、言い続ける気がしなくなったからだ。理屈りくつにあっているようでいて

も、どこか醜さを感じさせる言葉というものがある。きっとこの言葉もそうなのだ。恐らく昆虫に
どはないだろう。それはいまでもそう思っている。だが、だからといって「蟬が壊れた」はない。蟬は蟬なりの
仕方です、つまり静かに土に還かえって行くのである。蟬には蟬なりのかけがえのない命がある。命を前にした
時、やはり私自身、命をもつ一個の生物として、それなりの敬意を払はらう必要がある。それを外すから醜い言葉に
なる。

ただ、ここで「蚊には蚊のかけがえのない命が……」^④といえないところが辛い。いえない根拠には、蟬は夏の
賑にぎやかな使者だが、蚊は安眠あんみんを妨まげる厄介やくかいな代物しろものにすぎないという、私の好悪こうおが関係している。蟬や蚊自体の中
から出てくるものというよりも、人間からみた視点の存在が効きいている。ツクツクボウシのリズミカルな鳴き声
は耳こに心地こころよくても、夜中に耳元みみもとで騒さわぐ蚊の羽音は腹立たしいだけだ。道に転がり、死にかかつてはいるがまだ
生きている蟬を見かけたら、私はそれを樹きの幹こに戻してやる。「I」、部屋の中で蚊を見つけたら、迷うこと
なく叩たたきつぶす。へ人間の勝手さから、なかなか抜ぬけきれない。

いずれにしろ、「蟬が壊れた」などという、不謹慎ふきんしんな言葉を授業中に聞かされた学生の皆さんみな、ご免めんなさい。
そういうば、この言葉を発した途端とたん、大声で叫さけんでいた女子学生がいたつけ。あれは彼女かのじょなりの精一杯せいいつぱいの異議申
し立てだったのだろう。ご免なさい。

と、ここまで書いてきて、また性懲りしょうちもなく、私は次のような自問をする羽目はめになる。「蟬は壊れた」が我な
がら酷ひどい言葉だとするなら、蟬は助けても蚊は殺すわけだから、蚊を殺す時、私は「蚊を壊した」といっても構
わないのだろうか、と。

アメリカの哲学者ネーゲルには『コウモリであるとはどのようなことか』（一九七九）という本があるが、彼に即して述べるなら〈コウモリであること〉がどのようなことかさえ、到底分りそうもない人間に、〈蚊であること〉がどのようなことかなど、まず絶対に分りそうもない。にもかかわらず、蚊が人の肌の上に着地し、後ろ足を挙げながら素早く針を突き刺す様などは、一種の巧みさと完成した感じをわれわれに与える。それにとにかく蚊と人間とはどれほど体の造りが違っていたとしても、われわれは直観的にそれが **Z** だということを理解する。だから、部屋の中の蚊を殺す私でも、「蚊を壊した」とはいえないのだ。蚊は、蚊なりの姿形で生きているというのは明らかだからだ。蚊は壊れるのではなく、死ぬのである。（中略）

雨上がりの朝、道にさまよい出ているミミズを見つけたら、私ならどうするだろうか。急いでいる時は一瞥^{※いちべつ}を与えながらも、そのまま通り過ぎる。それほど急いでいない時には、それを素手で捕まえ草むらに放り投げてやる。ヌルツとしていて、指先で慌てたように動くそれは気持ちがいいとはいえないし、助けてやろうとしているのに捕食者に捕まると区別できないせいかな、やたらに騒ぐのが煩わしいが、とにかく助けてやる。〈ミミズの命〉といえども、ただの石ころほどの価値しかないとはいえず、数日後に干からびた死骸を見ると憐れに思うだろうから、時間がある時には助ける。他方、もし急いでいるなら、死骸になっても仕方がないと考えるだろう。「Ⅱ」例えば博論審査^{※はくろんしんさ}で急いでいるような時、審査対象の学生は何日も前から胃がキリキリ痛むような緊張を味わい、その日のために必死で準備をしてくるはずだから、たかがミミズのために所定の時刻に遅れるわけにはいかないからだ（仮にミミズを拾い上げるには二〇秒もかからないとしても、急いでいる時はその一瞬が重

みをもつように感じられる、そういうものなのだ。

このことは二つの判断を内包している。第一に、a は b よりは貴重だという判断。第二に、しかしそれは、c よりは重要ではないという判断である。(中略) 通勤時間の何気ない一齣いちしゅうの中で、或る二つの行動が分岐ぶんぎする可能性をもつ時、そこにはこのように、同じ命を抱かかえた存在同士として、一瞬の軽重の価値判断がなされているものなのだ。われわれ人間は、人間以外の本当に数多くの〈命の形〉に囲まれて生きている。人間以外にいろいろな生物がいるからこそ、この世界は楽しく、人生もまた、その生物たちとのやりとりの中で、それ相応の楽しさを刻み込む。五七歳ごしちさいの私は、いままでに道端みちばたにひっくり返った蟬を二、三匹さんびき助けたことがある。そんな些細ささいなことが、人生の中でそれなりに満足を与える逸話いつわになっている。

(金森修『動物に魂はあるのか 生命を見つめる哲学』より)

※収斂する……ひとつにまとまる。

※〈哲学〉……考え方。

※一瞥……ちらっと見ること。

※博論審査……大学院生にとつての卒業試験のようなもの。筆者は大学の教員で、学生を審査する立場。

※内包している……含んでいる。

問1 空欄 X にあてはまる四字熟語として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。(な

お、空欄 X は本文中に二か所あり、両方とも同じものが入る。)

- ア 大義名分 イ 喜怒哀楽 ウ 疑心暗鬼 エ 不平不満 オ 一喜一憂

問2 ——— ①『蟬が壊れた』と述べてもいいのだ」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も

適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 蟬は〈土の精〉として土に戻るだけだから。
イ 蟬が動かなくなることの比喻表現だから。
ウ 蟬は機械のようなものに過ぎないから。
エ 蟬の死を直視するのは辛いことだから。
オ 蟬に対する嫌悪感を隠すことはできないから。

問3 空欄 Y にあてはまる語として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ゆらゆら イ のろのろ ウ くよくよ エ はらはら オ くらくら

問4 ——— ②「醜さを感じる」とありますが、それはなぜですか。三十五字以上四十字以内で答えなさい。

問5 ——— ③ 「理屈にあっているようでも、どこか醜さを感じさせる言葉」とありますが、

(1) その例文として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 風が泣いている。 イ 石ころが砕ける。 ウ 猫を修理する。

エ 体が動かない。 オ 金魚を世話する。

(2) (1)で答えた言葉を、(例)にならって「醜さを感じさせない言葉」に自分で考えて改めなさい。(なお、

解答は訂正後のみを記すこと。)

(例) **訂正前**

蟬が壊れた

↓ **訂正後**

蟬が死んだ

問6 ——— ④ 「『蚊には蚊のかけがえない命が……』といえない」とありますが、それはなぜですか。二十

字以内で答えなさい。

問7 空欄「Ⅰ」・「Ⅱ」にあてはまる語として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答え

なさい。(ただし、同じものは二度使わないこと。)

ア だが イ つまり ウ だから エ あるいは オ なぜなら カ ところで

問8 空欄 **Z** にあてはまる語として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 害虫 イ 生物 ウ 機械 エ 妖精 オ 成虫

問9 空欄 a・b・c にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適切なものを次の中

から選び、記号で答えなさい。

- ア a…われわれ人間 b…石ころ c…〈ミミズ〉の命
- イ a…われわれ人間 b…〈ミミズ〉の命 c…石ころ
- ウ a…石ころ b…〈ミミズ〉の命 c…われわれ人間
- エ a…〈ミミズ〉の命 b…石ころ c…われわれ人間
- オ a…〈ミミズ〉の命 b…われわれ人間 c…石ころ

問10 本文の内容にあてはまるものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 蟬は〈土の精〉だという考え方と、蟬は機械のようなものだという考え方とは、「その死を悲しまない」という点では共通している。

イ 「蟬が壊れた」という言葉に疑問を投げかけた学生も、「蚊が壊れた」という言葉であれば受け入れて納得^{とく}してくれたはずである。

ウ いかなる昆虫であつてもひとつの生命には違いないので、その死は「壊れる」ではなく「死ぬ」という言葉で表現すべきだ。

エ あらゆるものに魂は宿るので、昆虫はもちろん、石ころなどの物質をも生命のひとつと捉^{とら}えて大切に扱^{あつか}わなければならない。

オ 昆虫が命の危険にさらされていたら何が何でも助けてあげるのが、あらゆる生物と共に生きる人間としての責任である。

カ さまざまな生物たちとのやりとりが失われがちなために、現代に生きる人間は心が貧しくなってしまうている。



次の文章は、水野瑠見『十四歳日和』の一節です。本文は、小学校の頃から絵を描くという共通の趣味を通じて仲よしの葉子としおりが、中学校の入学式前に待ち合わせるところから始まります。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

「そのカッコなら、すぐに友達くらいできるよ。自信持って行ってきな！」

入学式の朝、お姉ちゃんにどしんと背中をたたかれて家を出た。この姿を見たら、しおりはなんて言ってくれるだろう？ 似合ってるね、いい感じだよってほめてくれるだろうか——そう思うと、胸がどきどきして、自然と早足になっていた。

待ち合わせは、中学校の校門の前。七分咲きの桜の下に、ワンサイズ大きく見えるしおりの制服姿を見つけた時、私は迷わず、まっすぐに走っていった。

「しおり！」

名前を呼ぶと、落ち着かなげに足元ばかり見ていたしおりが、ほっとしたように顔を上げた。でも……笑みが浮かんだのは一瞬だった。駆け寄ってきた私を見るなり、しおりがはっと頬をこわばらせたからだだった。

「なんか、雰囲気変わった？ 葉子っぽくないっていうか……」

「……変、かな？」

遠慮がちなしおりの言葉に、さっきまでの高揚感がみるみるしぼんで、私は顔をくもらせた。すると、あわてたようにしおりがぶんぶんと首を横にふった。

「全然！ 変じゃない。かわいいよ、すごく。だけど——」^B

言いよんだ後、「……ごめん、見なれてないからだね。きっと」と、しおりは自分に言い聞かせるようにつぶやいて、小さく笑った。なぜか、とてもさみしそうに。

今になって思えば、あの時しおりは、すべてをさどっていたのかもしれない。

あの後、初めてのクラス発表で、お互い^{たが}がばらけてしまうことも。

そして、私たちの距離^{きょり}が、やがて開いていってしまうことも。

中学校生活は、小学校のころとはまるで別物だった。

「ねえねえ、名前、なんていうの？」

「葉子ちゃん、よかつたらこっちおいでよ。一緒^{いっしょ}にしゃべろう」

そんなふう^Cにクラスの子たちが気さくに声をかけてくれるたび、なんだか夢か冗談^{じやうだん}みたい、と私は思った。だって見た目が変わっただけで、周りの反応がこんなにもちがうなんて。こんなにも、世界がやさしくなるなんて——。

休み時間を一緒に過ごす友達ができた。

慣れない恋^{こい}バナやおしゃれ談義にも、笑顔で X ようになった。

もうだれも、私を指さして笑ったりしないし、バカにすることだっていない。みんなと同じタイミングで笑ったり驚^{おどろ}いたりさえしていれば、日々は平和に過ぎていく。それはもう、思わず感動するぐらい、毎日、格段に過

ごしやすくなっていた。

だけど……しおりのほうは、そうじゃなかったんだ。

一年生のころ、廊下ろうかの端はしの教室の中に、ひとりうつむいているしおりの姿をよく見かけた。

そんな時、しおりの机には、決まってスケッチブックが開かれていた。まるでそれが、一種のお守りか何かみたい。周りのおしゃべりや笑い声から切り離はなされて、黙々もくもくと鉛筆えんぴつを走らせるしおりの横顔は、遠くから見てもひどく目立った。

話しかけなきゃ。手をふらなきゃ。「しおり！」って笑顔で呼びかけるだけでいい。そうしたら、しおりはほっとした顔になって、手をふり返してくれるだろう——。

そう分かっていたのに、いざとなると、私はしおりに声をかけることができなかった。いたたまれなくて、後bろめたい。罪悪感はいつだってあったのに、いつしか私は、しおりの教室の前を足早に横切るようになっていた。

理由はひとつ。しおりに話しかけることで、自分も「そっち側」だって他の子たちに思われるのが、私は、怖こわかったんだ。

「日向ひなた」と「日陰ひかげ」^②の境界線——それが、私たちをくつきりと分ける。

そのことに、早くからしおりも気づいていたんだろう。廊下やトイレですれちがう時、しおりはもう、私のほうを見ようとはしなかった。かたくなにうつむいたまま、すばやく Y を返し、そっと背中を向ける。

ケンカをしたわけでも、お互いを嫌いになったわけでもない。なのに、私たちはそうやってどんどん離れて

いって、一年ぶりに同じクラスになった今、もう「おはよう」や「バイバイ」さえ交わさない。まるで最初から、赤の他人だったみたいに。

ドアを開けると、宙にほこりがきらきら舞^まって、絵の具のにおいが鼻先をかすめた。

うちの中学校の美術室は校舎の最上階の南向きにあるから、他のどの教室よりも空が近い。特にグラウンドを見下ろせるベランダは、絶好の日向ぼっこスポットだ。

「わ、あそこ、染谷先生発見！」

隣で美美の華^{はな}やいだ声^{こゑ}がして、私はグラウンドに目をやった。

視線の先では、数学の染谷先生が、クラスの男子数人とサッカーボールを蹴^けって遊んでる。スーツで砂けむりを散らして駆け回る先生は、今年入ったばかりの新任とあって、「教師」というよりは、「大学生のお兄さん」みたいに見える。

「やーっ！ かつこいい！ ていうか笑顔、かわいすぎ！」

さつきから手すりに身を乗り出して黄色い声を上げてる美美は、このところ染谷先生にすっかり夢中だ。先生の姿を見かけるたびに、ほつぺたを染めてはしゃいでる。

「ほんとだ。ソメ先、けっこううまいじゃん、サッカー」

「よかったねー、美美！ こんなアリーナで拝めてさ」

朱里^{あかり}とりっちゃんも便乗して盛り上がる中、私はなんとなくその空気についていけず、ただぎこちないほほえ

みを浮かべていた。グループのみんなはもれなく恋バナ好きだけど、正直なところ、私は、恋と違ってよく分らない。小学生の時はアニメや漫画のキャラについてあれだけ熱心にしおりと語れたのに、中学生になって対象が現実の男の人になったとたん、気おくれするようになってしまった。

——ダメだなあ、私。いつまでも、ひとりだけ子どもっぽくて……。

朱里たちと一緒にいると、ときどき、今みたいにさみしくなる瞬間がある。みんなと一緒にいるのに、なぜか、ひとりぼっちでいるような感覚になる。

ふう、と小さく息を吐いて、私は欄干に背中を預ける。そのまま美術室のほうにぼんやりと目をやって、そしてふと視線をとめた。正面の壁沿いに置かれた木製の棚。その上にキャンバスが数枚立てかけてあるのが見えたからだった。

もしかして、美術部の？ 気づいた瞬間、心臓が小さく音を立てて鳴った。

もっと近くで見てみたい。そう思った。

「あの……私、先に中入ってるね」

一応声をかけたけれど、サッカーに釘づけの朱里たちからは、いつこうに返事がない。迷ったものの、いや、と思い直して、私はひとり、そっとその場を後にした。

彫刻刀の傷跡の残る机の間を横切って、つきあたりの棚の前で足を止める。キャンバスは、全部で六枚あった。静物画、抽象画、部員同士を描いた人物画もある。どれも上手ではあったけど、私の目は、その中の一枚に釘づけになっていた。

それは風景画だった。

キャンバスの真ん中にまっすぐ延びるのは、小砂利が散らばる一本道。両わきの田んぼには水が張られて、鏡のように空を映し込んでいいる。その上に広がる本物の空は、水色とオレンジが混じり合った、淡い夕暮れの色をしていた。

ありふれた景色。なのにその絵だけ、なぜかぴかりと光って見えた。夕暮れの涼やかな風が足元を吹き抜けたような気がして、胸がどきどきする。だれの絵なんだろう？ これだけ上手なら三年生の先輩か、もしかすると、先生が描いたものかもしれない。

気がつくと、キャンバスに手を伸ばしていた。

そうつと裏返し、木枠のすみっこに鉛筆で走り書きされたサインを見つける。

と、同時に、息が止まった。

E
~~~~~  
嘘。

④ そこにあつたのは、まぎれもなく、しおりの名前だった。

嘘だ、ともう一度、私は思う。

チャイムが鳴って、私はあわててキャンバスを元の場所に戻す。耳をすますと、廊下をばたばたと走る、たくさんさんの足音が近づいてくるのが聞こえた。

だけど私はその場から動くことができず、呆然と立ち尽くしていた。

思い出すのは、中学に入って間もないころの、ひとつの記憶<sup>きおく</sup>。

「なんかさー、美術部って超<sup>ちやう</sup>地味じゃない？」

入学式から五日目に開かれた、部活動紹介<sup>しやうかい</sup>。私の後ろの列に座った女子たちがそう言って、忍<sup>しの</sup>び笑いをもらしてた。その時壇上<sup>だんじやう</sup>には、キャンバスをひしと胸に抱<sup>かか</sup>えて、耳を真っ赤にして、  
美術部の男子の先輩の姿があった。

Z

紹介文を読み上げる

「あの先輩もオタクっぽいしさー。あたし、無理。ていうかダサイし」

「だよねえ。やっぱ部活は、運動部一択<sup>いったく</sup>かなあ」

ひそひそと交わされるその声を聞きながら、あの時私<sup>わたし</sup>はくちびるをかみしめて、ぎゅつとひざを抱<sup>かか</sup>えていた。まるで自分がしくじったみたいに、耳たぶが熱かった。

美術部に入りたい。ずっと、そう思っていた。

だけどそうしたら、私もあの先輩のようにみんなに笑われてしまうんだろうか。せつかく、やっと周りに溶<sup>と</sup>け込めそうになっているのに、また、小学校のころに逆戻りしちゃうんだろうか……。そう思ったら、心がすくんだ。

私は結局、美術部には入らなかった。

4 だけど他にやりたい部活もなくて、今でも帰宅部のままだ。大丈夫<sup>だいじやうぶ</sup>、部活じゃなくても絵は描ける。最初はそんなふう<sup>4</sup>に思っていたけど、授業や宿題に追われるうち、どんどん絵を描くことは減っていた。なのにその間にも、しおりは歩きつづけていたんだ。ひとりでも、ひとりきりでも。

⑤ たまらなくなって、私はぎゅっと目をつぶった。

——十年後、二十年後、さらさらした場所にいるのは、私じゃない。しおりのほうだ。

問1 〰〰〰A〱E「——(ダッシュ記号)」の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 〰〰〰Aのダッシュ記号は、長い時間経過があったことを示す。

イ 〰〰〰Bのダッシュ記号は、人物の言葉や思いの省略を示す。

ウ 〰〰〰Cのダッシュ記号は、想像上の世界から現実への転換てんかんを示す。

エ 〰〰〰Dのダッシュ記号は、過去の発言の引用であることを示す。

オ 〰〰〰Eのダッシュ記号は、人物の心情や考えの変化を示す。

問2 ——— ①「頬をこわばらせた」とありますが、しおりはなぜ頬をこわばらせたと考えられますか。その説

明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 小学校の頃に比べ、ずいぶん大人っぽい葉子の服装を見て、似合っていないと感じたから。
- イ 葉子の雰囲気が変わったのを察して、もう同じ世界では生きていけないことを悟ったから。
- ウ いつもとは違う葉子の姿を見慣れておらず、どうしても危険な気配を感じてしまったから。
- エ 中学入学をきっかけに葉子だけが大人びていることに負い目を感じ、さみしく思ったから。
- オ 中学の入学式で緊張して落ち着かなかったので、葉子の雰囲気の変わり方に困惑したから。

問3 ——— a「高揚感」・b「後ろめたい」・c「忍び笑い」の説明として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

a 「高揚感」

- ア すでに姉に容姿を認められたという安心感。
- イ 友達ができそうな見た目になれたという自信。
- ウ やつと中学生らしい格好になれたというときめき。
- エ しおりに制服姿をやくほめられたという期待感。

b 「後ろめたい」

- ア 周りの子が離れていくのが怖くて、しおりに関われないやましさ。
- イ 小学校の時から仲良しなので、声をかけるべきだという責任感。
- ウ 話しかけることができたのに、それができなかったという恥ずかしさ。
- エ 友達を欲しがるしおりに、手助けできなかったという罪悪感。

c 「忍び笑い」

- ア 感情をむきだしにして笑うこと。
- イ 他人を見下すように笑うこと。
- ウ 人に分からないように笑うこと。
- エ 周りをおどすように笑うこと。

問4 空欄 X・Y・Z にあてはまる語句として最も適切なものをそれぞれ次の中から

選び、記号で答えなさい。

X

ア 声がかかる

イ 息が合う

ウ あいづちを打てる

エ 顔を合わせる

Y

ア きびす

イ 脚<sup>あし</sup>

ウ へそ

エ 視線

Z

ア たどたどしく

イ しらじらしく

ウ そらぞらしく

エ ずうずうしく

問5 — ②「日陰」とありますが、それはどのような世界ですか。次の文の空欄 I・II に

あてはまるように指定された字数の語句を本文から抜き出して答えなさい。

I (十三字)

がおらず、

II (十九字)

てクラスに一人で過ごす子

が属す世界。



問6 Ⅱ 1 「きらきら」・2 「正面の壁沿いに置かれた木製の棚」・3 「両わきの田んぼには水が張られて、

鏡のように空を映し込んでいる」・4 「しおりは歩きつづけていたんだ。ひとりでも、ひとりきりでも」に  
関係があるものとして最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。(ただし、同じもの  
は二度使わないこと。)

- |   |                        |   |                       |   |     |   |                        |
|---|------------------------|---|-----------------------|---|-----|---|------------------------|
| ア | 擬人法 <small>ぎじん</small> | イ | 直喩 <small>ちよく</small> | ウ | 擬音語 | エ | 倒置法 <small>たうち</small> |
| オ | 体言止め                   | カ | 隠喩 <small>いんゆ</small> | キ | 対句  | ク | 擬態語                    |

問7

③「みんなと一緒にいるのに、なぜか、ひとりぼっちでいるような感覚になる」とありますが、葉子はなぜこのような気持ちになったのですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア しおりのおかげで絵を描くことが好きになったのに、絵を趣味にしている人がみんなの中におらず、**孤独**を感じているから。

イ 周りの子が染谷先生に好意を抱いて夢中になっているが、葉子はそうした**雰囲気**に戸惑い、ついていくことができないから。

ウ 本来はアニメや漫画のキャラを熱く語ることができるしおりのような友達欲しかったのに、現実はそのようになっていないから。

エ みんなの理想の高さに比べ、自分がまだ子供であることを実感してしまい、周囲の空気に合わせるのに**疲れて**しまったから。

オ 大人の男性を恋愛対象とすることで、自分の属す集団の価値を高めようとするみんなに対して、あきれはててしまったから。

「嘘だ、ともう一度、私は思う」とありますが、このときの葉子の気持ちを説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 中学に入ってからしおり以外の友達と親しくしてしおりに声をかけられない自分に、しおりの上手な絵を見る資格はないのだと自分で自分を責めている。

イ しおりの描いた絵はありふれた絵であるのに、夕暮れの鮮やかさや涼やかに吹き抜ける風の心地よさが現実のように感じられるもので心を奪われている。

ウ 人から後ろ指を指される美術部に所属する一方で、自分の描きたいものを描き、それが先輩や先生から認められているしおりに強烈な嫉妬を感じている。

エ 魅力的な構図と色使いで涼やかな印象を与える絵に衝撃を受けたが、それが実はしおりの描いたものであったことに驚き、それを受け入れられずにいる。

問9 ——— ⑤ 「十年後、二十年後、きらきらした場所にいるのは、私じゃない。しおりのほうだ」とあります

が、なぜ葉子はしおりに対してこのような思いを持ったのですか。二人の対照的なあり方が分かるように、次の文の空欄 I ・ II に適切な内容を指定された字数で答えなさい。

自分が

I (三十字以内)

ときに、

しおりは

II (三十字以内)

から。